

第10回 キャリアセミナー レポート

作成者 市川諒

講演内容

今回のキャリアイベントはPwC Australiaのメルボルンオフィスにて開催された。海外ネットワークを駆使し、企業に価値を提供し続けるプロフェッショナリズムに感銘を受けるとともに、最前線で活躍する方々の貴重な経験を共有していただける機会であった。スピーカーとして長坂様、林様、岡村様、懇親会では吉村様もお招きし、それぞれのキャリアについて熱い議論が行われた。イベントの内容は以下の3点である

1. PwC企業説明

グローバルに活躍するPwCのネットワークやチーム構成について学んだ

2. パネルトーク

業務での体験談をもとにPwC、及びジャパンサービスデスクの仕事について学んだ

3. 懇親会

要約・感想

PwCは152カ国で33万人以上の従業員を抱えるグローバル企業であり、オーストラリア全体では約8000人の専門家が働いている。日本には東京、大阪、京都、福岡、名古屋の5つの都市にオフィスがあり、オーストラリアにはメルボルン、キャンベラ、シドニー及び西シドニー、ニューカッスル、パース、アデレード、ブリスベンの8都市にオフィスを構えている。両国とも主要都市を網羅しており、幅広い地域の業務に対応できる体制が整っている。PwCの特徴的な点はネットワークファームとして各国が別会社として機能していることだ。しかしながら、各国の連携は非常に緊密であり、国を跨いだプロジェクトが多く進行している。PwCは「テクノロジーを駆使し、人間の専門分野を組み合わせることで社会の課題を解決する」というテクノロジーと専門分野の両輪を大事にしており、世界情勢を考慮しながら、会計監査やデジタル分野で幅広いクライアントにサービスを提供している。例えば、PwCではESGレポートに力を入れ、企業のサステナビリティ向上にも大きく貢献している。

PwCではAssurance、Advisory、Tax&Legal、Enabling Functionの4つの分野に大きく分かれており、クライアントの要求に応じた最適なサポートを行っている。Assuranceでは監査業務を含む保証業務を主に提供しており、業務にはESGに関するレポート作成のサポートやリスク分析の支援なども含まれる。これらはオーストラリアに進出している多くの日系企業にとって重要である。Advisoryではコンサルティングやディールズを手がけている。今回登壇された

林様はディールズに所属しており、多くのM&Aや事業再生プロジェクトに関わる価値評価業務に携わってきた。Tax&Legalでは企業では調べ尽くすのが難しい、国を跨いだ法律などのサポートを行っている。Enable Functionでは主にテクノロジーや金融知識を用いた支援を行い、人事やマーケットリサーチなど、その業務内容は多岐にわたる。

今回登壇いただいた3名はそれぞれの分野に所属しながら、ジャパンサービスデスクというグループを組織し、オーストラリアで日本企業にサービスを提供している。日本語と英語のバイリンガルで対応できるチームがあることはクライアントにとっても安心できる要素だ。このようにサービスラインを跨いで人材を投入することで、適材適所なサービスを提供できるのである。

イベントではPwCでの働き方にも言及された。PwCは先住民や人種、LGBTQ+なども考慮し、チームの多様性を高めている。特に先住民の方々をチームの多様性に含める点において、オーストラリアらしさを感じた。働き方は非常に自由であり、服装や勤務時間は自分で選ぶことができる。例えばフォーマルな服装を求められる日がある一方、それ以外の日はパーカーで仕事に来る人もいるほどだ。その背景には、いつでも在宅勤務が可能であることが大きい。社内では「会社に来ない＝家で仕事をしている」という考え方が共通認識として浸透している。さらに在宅勤務の申請も不要であり、急な子供の対応なども柔軟にできる。育児休暇の支援も整っている。私が最も興味を持ったのは「Together Anywhere」という制度で、最大で4週間、有効な就労権を保持している他国で現在の仕事を続けられるものである。元々は帰省をサポートする目的で設立されたが、現在は誰もが利用できる制度となっている。この制度により、海外で仕事をするハードルが大幅に下がるだろう。

パネルセッションでは、林様と岡村様のこれまでのキャリアに焦点を当て、印象に残っているプロジェクト、海外で働く楽しみ、ジャパングデスク・PwCで働くこと、そして学生のうちにしておきたかったこと・アドバイスについてお話しいただいた。どの回答からもお二方の熱意が強く感じられる時間であった。まず第一に、お二方の説明が非常にわかりやすい。具体例を用いて、初めて学ぶ学生にも理解しやすいように説明してくださり、クライアントへの信頼できるサービスを容易に想像できた。例えば、林様はディールズに所属しM&Aを担当しているが、企業の買収をマイホームの購入に例えて説明してくださった。企業の買収は非常に重要な意思決定であり、一生に一度の大きな買い物とも呼ばれるマイホーム購入と似ている。さらに、家を購入する際にはローンを組み、その物件が割安か割高かを検討するのは、企業が将来のキャッシュフローから買収ターゲットの価値を考えることに例えられる。今持っている家具や壁紙が次の家でも合うかというのは、買収した会社と自社が買収後にうまく融合できるかどうかを考えることに似ている。もちろん、会社の買収はより複雑だが、このような例えを用いることで、より身近に感じられる内容となった。

印象に残っているプロジェクトについて、林様は有名企業同士の買収に携った経験を挙げられた。借入金の支払いの問題や、完全子会社化への流れについてもお話しいただいた。大規模なプロジェクトに関わる際は夜遅くまで仕事をすることもあるが、それはチームのお祭りのようだとおっしゃっていた。自分の行なっている業務が社会に大きな影響を与えることを肌で感じることができ、新聞に取り上げられることもあるという。チーム全体で社会にインパ

クトのある仕事をしているという感覚が、とても楽しいそうだ。実際にお話を聞いていて、楽しいことや、やりたいことで忙しいという印象を強く受けた。しかし、大規模なプロジェクトである分インサイダー情報の漏洩には特に注意が必要だとおっしゃった。実際に新聞社がリークすることもあり、社会全体に対して責任を負わなければならない場面もあるようだ。

岡村様は公認会計士として、監査というPwCの中核業務を担っている。印象に残っているプロジェクトとして、日本のPwCでリクルーティングに関する情報を一元化するプロジェクトを自ら提案し、牽引した経験をお話いただいた。自分の業務以外にも手を挙げれば活躍の機会がある点が魅力であり、そこから新たな視点や幅広いネットワークが生まれることもある。実際に岡村様はこのプロジェクトを通じて築いた人間関係や成功体験が、PwCオーストラリアに転籍したあとも続くPwCジャパンとの協力関係につながり、その先の新たな企業支援を生み出すことにつながっているという。

次に海外で働く楽しみについて林様は「専門スキル×英語」という点に軸を置かれた。林様は日本に在籍していた頃から、日系大企業の海外進出や買収、海外企業の日本市場でのビジネス支援を行っていたため、英語の重要性を深く理解されていた。公認会計士という専門スキルの価値をさらに発揮するため、英語力のさらなる強化に努められたそうだ。幸いPwCは海外との連携が強固であり、所属や地域に囚われない働き方が可能だ。メルボルンに来てからは、英語で苦勞することもあった一方で会計という専門知識には世界共通のスタンダードがあり、自分のスキルの汎用性を再認識されたそうだ。

林様は日本とオーストラリアの違いにも言及された。日本の所属チームは多様性の課題を抱えており、自身は多数派であることが多かった。しかしオーストラリアでは逆に自分が少数派となり、マイノリティとしての立場を感じる人が多いそうだ。その多様性に適応する能力が重要であり、それはキャリアを歩む上でも非常に重要な要素であるという。さらにクライアントの特徴として、日本ではクライアントの要求が非常に細かいということが挙げられる。一方で、オーストラリアのクライアントは議論を好み、細かさよりも論理的であるかを重視する。その際、日本では責任の所在を重視にするため、メールなどの文書で残すことが求められるが、オーストラリアでは電話で簡潔に話をまとめようとする人が多いそうだ。岡村様もこれに同意され、日本では気遣いが重要であり、明示的に教わることのない慣例やフォーマットに従った対応が求められることが多く、成果物やコミュニケーションがより細かいとおっしゃった。またオーストラリアでは、女性がむしろ多数派という場合も多く、キャリアモデルを見つけやすい環境にあるという。

PwC・ジャパンサービスデスクで働くことについて、林様は自分が社会に与える影響の大きさを強調された。PwCでは、多くのクライアントから信頼を得てそれぞれの企業の重大な課題を解決することのお手伝いするため、ニュースで取り上げられるようなプロジェクトに関わる機会が多くある。その度に自分が社会に貢献していると強く感じられるそうだ。やりがいについて、クライアント自身も解決策を模索しているが、それを上回る提案しなければならないとおっしゃった。実際にクライアントに提出するレポートは短いページ数だが、その背後では膨大な量の検討、計算が行われているという。本を読んだだけで習得できるようなやり方は求められていないとおっしゃった。しかし、そのような情報がクライアントに大き

な利益をもたらす可能性がある、ということがやりがいでもあるそうだ。また、ジャパンサービスデスクで働くにあたって、日本人であるということは大きなメリットだという。オーストラリアに駐在している日本人との交流は日本国内で働いている時には得ることができない貴重な機会であり、学生たちも積極的に日本人コミュニティにも参加するよう促された。

岡村様はアシュアランス業務に従事しており、情報に信頼性を与えることが仕事のため、企業の本音を聞きだす必要があるとおっしゃった。クライアントと信頼関係を築き、情報を引き出せる能力こそがチームの価値であり、商品売らない分、メンバーがもつ能力を最大限に引き出すことが非常に重要であると述べられた。かつ、その点は、英語を用いるという点を除き、日本で行ってきた財務監査と大きな違いはないようだ。なお、現在は、サステナビリティ開示関連の業務が増えている。オーストラリアは世界各国と比べて法的に先進的であり、オーストラリアの日系子会社は本社よりも早くサステナビリティ情報開示が求められる場合が多い。その対応に日系企業が窮することのないよう支援を行っている。さらに、オーストラリアのサステナビリティに関する情報を日本に伝えるという仕事も担っている。

学生のうちにやっておきたいこと・アドバイスとして、お二方は多くの人に会うということも挙げられた。多くの人に会い、挫折を経験しながらも、挑戦し続けることが大切であるという。実際に社会人として働いている方の生の声を聞くことで、会社の理念以上の仕事を学ぶことができるだろう。日本で働く場合、海外大生にとって英語は大きな利点となるが、英語だけできる人にならない為にも自分の価値を發揮できるもう一つの武器が必要だとおっしゃった。お二方の場合、それが会計であったが、自分に合った武器を見つけるようにとアドバイスがあった。オーストラリアで働く場合は逆に日本人であることも武器になる。「日本人」がどのような人かを理解していることは、どれだけ英語ができて対抗できない強みになる。「英語×日本人×自分のやりたいこと」この3つを武器に、これからの学生生活で挑戦したいことを見つけてほしいというお話であった。

今回のイベントにご参加いただき、準備してくださった長坂様、林様、岡村様に厚く御礼申し上げます。PwCでの働き方を学ぶと同時に、学生のうちにすべきことなど多くの熱いメッセージをいただくことができました。将来社会人として働くであろう学生にとって、非常に刺激的な時間となりました。

今回のイベントはメルボルン日本商工会議所のサポートにより実施をすることができました。我々のイベントの運営にご協力いただきありがとうございます。今後もより良いイベントを企画し、学生と企業の架け橋となるよう尽力してまいります。

グローバルキャリアパスメルボルン
市川

